論 文 審 査 の 要 旨 及 び 担 当 者

論文題名

『平家物語』の成立とその周辺

論文審査の要旨

治承４年（1180）12 月、平清盛の命を受けた平重衡率いる平家軍の南都焼き打ちによって、東大寺と興福寺は焼亡した。なかでも聖武天皇の発願になる東大寺の大仏殿が焼け落ちたことは、まさに末世・澆季の世を象徴する大事件であり、翌年の閏 2 月、平清盛が急逝すると、後白河法皇はただちに俊乗房重源を大勧進（浄財を募る勧進活動の総責任者）に任じ、東大寺の再建事業に着手した。

治承 4 年の南都炎上を「天竺・震旦にも、これ程の法滅あるべしとも覚えず」とする『平家物語』は、東大寺再建の勧進上人重源と、壇ノ浦合戦後の平家一門の人々との関わりをさまざまな物語として伝えている。塩山氏の論文は、重源の事跡と、平重盛の小松家一門、南都焼き打ちの張本人平重衡、また清盛没後の平家の棟梁となった平宗盛らの虚像と実像を掘り下げることで、『平家物語』の成立過程とその構成・構想の問題に、さまざまな角度から考察を加える。全体は、3 部構成、全 12 章からなる。

まず「第一部　小松家の物語の展開」の第一章では、『平家物語』で平家の嫡流とされる平重盛の小松家の物語が検討される。まず、重盛の法名が、史実では証空であるのに、『平家物語』では静連（浄蓮）とされ、また『平家物語』で重盛の嫡子とされる維盛の法名も、『平家』諸本で静円に定着してゆく過程が論じられ、法名の改変をつうじて、しだいに小松家の嫡流系譜が作られてゆく過程が示される。

第一部の第二章・第三章では、平重盛の子の土佐守宗実が、『平家物語』では、平家滅亡後に重源の弟子になったとされ、また、実在した重源の弟子生蓮の法名が、宗実の法名として流用されたこと、そして宗実の法名が生蓮とされたのは、平清盛や重盛の法名、静海や静蓮の系譜に連なるものとして選ばれたことを論じる。また、そのようにして平家嫡流の小松家の物語が作られてゆく過程で、史実のうえでは、平家の棟梁の地位にあった平宗盛の人物像が、物語ではきわめて矮小化され、ネガティブな位置づけを与えられてゆく仕組みについて論じる。

「第二部　源平争乱の時代をめぐる歴史認識」では、まず、東大寺焼き打ちの大将軍だった平重衡の処刑をめぐる物語が考察される。とくに重衡の北の方大納言典侍の経歴について、従来、ほとんど実証的な再検討がなされてこなかった事実が指摘され、 大納言典侍が、じつは平家の騒乱後、近衛基通の子で興福寺一条院の院主となった実信の乳母となり、その関係で近

衛家の別邸日野殿に住んだこと、そうした歴史的事実を背景として、『平家物語』巻十一の重衡処刑にまつわる一連の物語が、日野を舞台にして生み出されたことを論証する。この塩山氏の説は、すでに研究論文として『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室編）に掲載されており、広く学界でも認知されている新説である。

第二部の第二章では、平治の乱後に源頼朝が捕らえられたとき、『吾妻鏡』や『平家物語』、および『平治物語』流布本では、平重盛が頼朝助命の口添えをしたことが語られる。だが、重盛による頼朝助命の口添えは、『愚管抄』や古本系の『平治物語』には記述がない。『吾妻鏡』や流布本『平治物語』の頼朝助命記事は、『平家物語』の影響下に作られた話だが、それではなぜ、『平家物語』は平重盛による頼朝の助命を語るのか。塩山氏はそこに、『平家物語』独自の歴史叙述の構想があったことを指摘する。

すなわち、『平家物語』は、平重盛を未来を予見しうる異能の人として語る。そのような重盛の口添えで頼朝が助命されたことは、頼朝が、重盛亡きあとの武家の棟梁の継承者として、まさに選ばれた人物であることを語ることになる。その結果として、頼朝に武家の棟梁の地位を譲り渡した平重盛の小松家は、史実に反して平家一門の嫡流家とされ、史実において一門の棟梁の地位にあった平宗盛は、物語では、棟梁としての器を欠く無能な人物として、極端に矮小化されて語られたのだとする。塩山氏のこの指摘は、『平家物語』の構想の問題にとどまらず、治承・寿永の内乱史研究にとっても無視できない指摘と思われる。

第二部の第三章では、興福寺大乗院の院主、尋尊の日記『大乗院寺社雑事記』をもとに、15世紀の尋尊の歴史認識が論じられる。尋尊は、琵琶法師の『平家物語』演奏を頻繁に聞いており、また琵琶法師の座組織である当道座の卜一惣検校との交流を通じて、『平家物語』本文（覚一本）を披見する機会も少なからずあったと思われる。そのような尋尊の源平合戦に関する知識と『平家物語』の記事内容との関係を検討し、そこから、当時の社会に流通していた歴史認識の背景にあった『平家物語』の役割について考察している。

「第三部　重源と『平家物語』」では、まず、東大寺再建の勧進活動を行った重源が、「入宋三度」という経歴を、みずから盛んに宣伝していたことを、当時の史料類から裏付ける。 そして重源の入宋は、史実ではあっても、東大寺再建よりも以前であること、それが 13 世紀後半から 14 世紀初めの『法然上人行状絵図』などになると、東大寺の再建時に重源は勧進上人として入宋したと語られるようになる。

また、『平家物語』の古本とされる延慶本によれば、東大寺の聖として入宋した重源は、平宗盛の遺児、宗親を伴っていたとされる。この話は､鴨長明が編集した説話集『発心集』にもみられるが、しかし『発心集』の古本系の諸本に、この宗親説話はない。そのことから、重源が東大寺勧進上人として入宋した話と、それに付随した平宗親の説話も、じつは増補された流布本系の『発心集』において、13 世紀末以降に作られた話であるとする。

また、第三部の第三章では、九条兼実の『玉葉』をはじめとして、重源を「ただ人にあらず」とする評価が、重源の生前から行われていたこと、そうした評価を背景に、重源はみずからを阿弥陀仏の化身として南無阿弥陀仏と自称し、その呼称が広く貴族社会に流通していたことが明らかにされる。そして延慶本『平家物語』や『法然上人行状絵図』は、そのようにして半ば神格化されていた重源を、醍醐寺の僧侶として語る。しかし鎌倉中期頃から、重源は高野山に

参籠して、弘法大師から東大寺再建の霊夢を蒙ったとする物語が流通しはじめる。重源と高野山の関係を強調するのは、おもに東大寺関係の資料だが、塩山氏によれば、その背景には、13世紀末から 14 世紀にかけて、醍醐寺と東大寺とが本末関係（本山と末寺の関係）を争った歴史的事実が背景として存在したという。つまり、「ただ人なら」ざる南無阿弥陀仏重源の位置づけは、『平家物語』の成立当時、きわめてセンシティブな問題であったことが論じられる。

そして第二部の第四章では、『平家物語』の平重衡、平宗実、平宗親のそれぞれの物語に登場する重源は、いずれも「ただ人なら」ざる高僧として語られるが、『平家物語』が、平家嫡流の小松家の物語として完成してゆくなかで、史実の上では平家の棟梁だった平宗盛（重盛の腹違いの弟）の存在は、しだいに物語におけるノイズのごときものとみなされ、したがって延慶本『平家物語』が語る宗盛の遺児、平宗親の物語も、のちの『平家』諸本では採用されなくなったのだとする。『平家物語』の宗親物語の位置づけを論じた重要な指摘だが、この指摘は、『平家物語』の歴史叙述のあり方全般に関わる問題としても興味ぶかい。

以上、塩山氏の論文は、東大寺の再建事業の中心に位置した俊乗房重源に焦点をあて、『平家物語』における平重盛とその小松家一門、および源頼朝、平宗盛の物語が政治的な作為や虚構をまじえて語られていることを、文献資料を博捜して具体的にあきらかにし、また、そうした作為や虚構を交えた歴史の語り方が、鎌倉時代の文学、宗教、政治の問題とも密接に関連していることを具体的に明らかにした点で、日本文学研究はもちろん、日本中世の宗教史や政治史研究においても大きな意義を有する論文といえよう。

以上のような理由で、論文審査担当者 3 名は、塩山貴奈の学位請求論文を、博士の学位請求にふさわしい論文であると、全員一致で認めた。

論文審査主査　　兵 藤 裕 己　教授
鈴 木 健 一　教授
伊 籐　　聡　特別非常勤講師
（茨城大学人文社会科学部教授）